

＋ 広島赤十字・原爆病院 血液検査研修報告

検査三科血液一般
釘宮 亘

Hiroshima Red Cross Hospital & Atomic-bomb Survivors Hospital

研修目的

当検査センター血液部門における**スペシャリストの育成と血液部門の強化**のために、今回丸2か月、広島赤十字・原爆病院にて駐在研修させていただきました。

昨年10月3日から11月30日までの2ヶ月間、広島赤十字・原爆病院で血液検査の研修をさせていただきました。研修内容は、当検査センターと同様のルーチン業務で、病棟への検体回収、検体測定、再検、染色、結果確定でした。

まず分析機の立ち上げから始まり、病棟へ検体回収に行きます。そして検査室に戻ります。血液内科の検体は全て検査技師によるスライド作製です。手で作製することにより、患者名と疾患名を合致させ、スムーズな鏡検ができる仕組みになっていました。

外来の検体は、特に新患の場合には『IDと新患です』と、血液スタッフ全員が新患であることを周知できるようになっていました。CBC（Complete Blood Count）のデータが判明し、重篤な疾患が疑われるようであれば、直ちにWright染色標本で確認し、分析機との整合性をはかっていました。

同時に輸血が必要と予測される場合には、輸血検査科と連絡を取り合い、迅速な対応が行える準備に入っていました。

骨髄穿刺も見学させていただきました。臨床の



▲研修先の血液検査室



▲当検査センター血液一般部門



▲鏡検する釘宮(筆者)

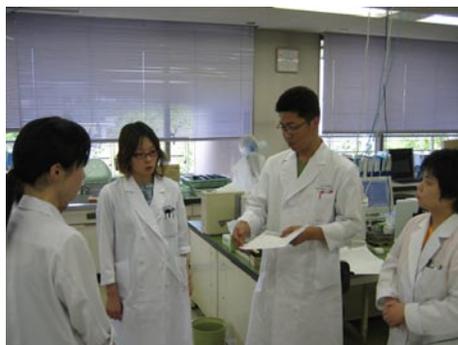
場での情報（目で見た情報⇒患者の容態、耳で聞き取った情報⇒医師や看護師との会話、手で感じた情報⇒標本作成時の感触）は全て検査室へ持ち帰り、全スタッフに伝達し共有していました。情報を共有することにより、1枚の塗抹標本の情報と臨床の場での情報を結びつけ、早急な報告へとつながると思いました。

一見、何も関係のないように思われる情報が入ることにより、早急な治療に直結すると、改めてそう感じられました。

現在、当検査センターの血液部門では、前日異常細胞が見られた標本の再検討や他施設との標本の見比べもしています。

私たちの仕事は、血液の中を直接覗き見ることに近く、血液細胞の状態が正常か否かを自分の目で判断することにあります。最近では、分析機の機能向上により、ほぼ信頼できるデータが得られるようになってきましたが、分析機から出た異常データについては、直接検査技師が顕微鏡で、的確な判断基準をもって、血液細胞の形態観察ができなければなりません。

検査技師として初心に戻り、常に臨床の先生方および患者様を意識した検査技師であり続けたいと思います。



▲血液一般部門の情報伝達



▲異常細胞発見時の再検討



▲異常細胞をパソコンへ取込み自主学习

謝辞

今回の研修で御指導いただいた広島赤十字・原爆病院院長 土肥博雄先生をはじめ、市川技師長、楠木課長、川上技師および血液検査科のスタッフの方々に深謝いたします。